

畦道

調査団体名	特定非営利活動法人「みち」 デイサービス型地域活動支援センター「畦道」	団体代表者名	代表理事 今枝美恵子 対応してくれた人の名前 : 今枝美恵子
団体URL			
設立年	2018年		
活動拠点	豊田市	調査員	丹羽健司
取材日	2018年12月27日	レポート作成者	丹羽健司

活動内容

2018年、山間部に住む精神障がい者の居場所づくりと就労支援を目指す、デイサービス型地域活動支援センター「畦道(あぜみち)」を足助地区新盛町に開所。登録者は豊田市に住む20代から60代までの26名で、常時8人ほどが利用している。

活動は月～金曜日の9:30～15:30で、利用者の8割を3人のスタッフが車で送迎している。利用者の給料となる事業は、薪割り、木工商品づくり、ガラ紡の糸づくり、祝日(不定期)の五平餅の販売、農作業、野菜作りなど山村ならではのものである。

このような施設は山間部では少なく、山間部の精神障がい者は都市部まで通わなければ障がい福祉サービスを受けることができないのが現状である。障がい者も健常者も、誰でも住み慣れた地域で自分に合った仕事ができることを目指している。

キャッチフレーズ

誰もが住み慣れた地域で輝けるように

会のモットー(何を大切にしているか)

病気や障がいがあっても、個人が尊重される活躍の場があり、
一人で苦しむことなく安心して暮らし続けられる地域づくりを目指す。

設立から現在に至るまで変化したこと

副代表の鈴木悠太さんは足助出身で、山間部に住む精神障がい者の方が都市部の事業所に通っている現状を知り、住み慣れた地域で活躍の場があることが必要だと思い、大学の同期だった代表の今枝美恵子さんと山間部に事業所を作ること計画した。しかし山間部での開設は利用対象人数が少なく経営的にも成り立たない、自殺行為だと仲間から忠告を受けた。それほど山間部での精神障がい者福祉施設の開設は稀なことであり、困難な事業とされている。

代表的な精神障がいの統合失調症の発症率は100人に1人、うつ病は4人に1人と言われ、誰もが発症する可能性がある身近な病気だけれど、適切な治療をすれば症状をコントロールしながら、その人らしく働き暮らすことが可能な病気でもある。郡部5地区で精神障害者保健福祉手帳の数は120人余り、開設3年前から事業所の必要性があるのかニーズ調査をおこない、1年前には交流館で障がい当事者・家族からヒアリングなどをして、需要の存在と必要とされていることを確信した。

当初から耕作放棄地などを活用した農林業を主とした事業展開を構想したが、まずは持続性を重視して、障がい者福祉の仕事内容として農林業などをする事とした。おいでん・さんそんセンター(山村再生担い手づくり事例集Ⅲ「おいでん・さんそんセンター」参照)の仲介で五平餅店の旧店舗を借りることができた。懸念の地元受け入れは、自治会でキーパーソンに集まってもらい説明会を開いた。会長には「あんたらのやろうとしていることは良いことだからやればいい。それよりあんたらの生活は大丈夫か?」と、背中を押されただけでなく心配もしていただいた。反対はなく快く受け入れてもらえた。今では新盛小学校の行事に出席するなど交流もおこなっている。

連携している団体・専門家・自治体など

おいでん・さんそんセンター、豊田市障がい福祉課、あさひ薪研(山村再生担い手づくり事例集Ⅲ「あさひ薪づくり研究会」参照)、きらり(豊田市の福祉アンテナショップ)

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

そもそもこの地域で障がい者福祉サービス事業所というよりも、一つの人材派遣会社になれるとよいと思っている。

山間地域の仕事は季節ごとの需要が異なり、それに応じた人手の供給が求められる。仕事により人により向き不向きがある。農作業など季節ごとに合う仕事を選べるのがいいと考えている。

旭木の駅プロジェクト(山村再生担い手づくり事例集「旭木の駅プロジェクト」参照)の地元間伐材を使った、あさひ薪研へ納入する薪づくりは、機械で割るタイプの人と、斧で割るのに夢中になる人がいて面白い。地元で綿を栽培し、綿花を収穫して(綿摘み)、繰り機で実と綿を分離してから布団屋さんでシート状の綿に打ってもらう。次にそれを糸車で糸に紡ぐ仕事もある。根気のある仕事だが楽しそうに続けている。間伐材をあさひ製材で加工して、ここで刻んで小さな額を組み立てて製品出荷している。農山村にはそれぞれに合った仕事があつていい。他にも地域産物を最大限に活かした仕事作りを目指している。



木工機械を使って額づくり



「畦道」の隣での薪作りのようす

現在直面している課題

5年以内に、障がい者福祉サービスの一つである就労継続支援B型事業所に移行しなければならない。山間部は広いので通所に不便なため拠点の課題もある。例えば稲武ではブルーベリー、下山だったら五平餅やキクの栽培、原木しいたけなど地域の特性に合った仕事とつながりたい。

就労希望の方でも、一般企業でバリバリ働くより、自分に合ったのんびりマイペースでやれる仕事を望んでいる方が多い。バリバリ働くことを希望される方は、畦道ではなく企業での研修や面接練習を中心におこなっている事業所を紹介している。

山間部の小規模事業所でどのような就労支援ができるか、大きい金額にならなくても地元とつながってその方に合った働き方を支援したい。そのためにはこの地域での働き場所の開拓とメニューの充実が欠かせない。それを支えるのは地域での信頼関係とネットワークで、たくさんの多様な人々の応援がどうしても必要だ。

今後やってみたいこと

障がい者の人材派遣業は、安心して転職できる(派遣先を変える)ことが重要。現在の障がい者就労支援は企業へ就職し、合わなくて退職すると、「ああダメだった」と「失敗」につながってしまう。その「失敗」だと感じる事が障がい当事者も家族も、自信を無くすことにつながる。人材派遣会社であれば、「この仕事が合わなかったらこっちの仕事がありますよ」と他の仕事を紹介できる。「失敗」がないと思う。それぞれに適った仕事が見つかるまで安心して転職(派遣先の変更)を繰り返せることが魅力だと感じる。就労支援は派遣先やその仕事に障がい者たちを当てはめるのではなく、当事者に合った仕事を見つけること、つくることだと思う。それが、休みたい時には休める「安心してさぼれる会社」、誰もが「安心してさぼれる社会」づくりにつながると思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

山間部で人手を必要としている方々との出会いが拡がるといいなと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 未来の「畦道」は？

<答え>

病気や障がいのある人とない人が一緒に働く農山村での人材派遣会社。地域で求められる働き手と、農山村で働きたい障がい者や高齢者や健常者とをマッチングする仕事を軌道に乗せ、耕作放棄地での農業や農山村の手仕事などを活用して新しい仕事を創り出したい。そこではスタッフも健常者も障がい者も混然としているのが理想。

取材者感想

インタビューの中で不思議な感覚に襲われた。精神障がい者福祉の話がそのまま、農山村を目指すアイターン者、いや都市と農村の根源的な課題と重なっていった。

かつて柳田園男が「都市が病んだ時は農山村に救いを求めよ」と予言したというが、まさにこのことだと思った。彼らは「福祉が障がい者を障がい者にしてしまう」危険も本能的に知っている。だからあくまで「田舎の人材派遣会社」にこだわるのだと思った。スタッフも健常者も障がい者も混然となって区別もつかない田舎の人材派遣会社で素敵だ。こうして農山村が都市を救うのだと思った。

写真



今枝美恵子理事長



みんなで農作業